

道頓堀繁盛記

～道頓堀五座からくだおれ、戎橋まで～



太閤・豊臣秀吉の命令で安井道頓(成安道頓)、安井道トらが開削した道頓堀(1615年完成)は、寛永3年(1626)、芝居および遊所の設置が許可されて以降、大阪を代表する繁華街として発展してきました。中座、角座、竹本座、浪花座、弁天座、朝日座といった櫓(芝居小屋)では、坂田藤十郎の和事の歌舞伎や、近松門左衛門の心中物の人形浄瑠璃、世にも珍妙なからくり芝居などが演じられ、芝居の見物客が利用した芝居茶屋や飲食店からは「くだおれ」の食文化も生まれました。数知れないエンターテインメントを産み出してきた、「なにわのブロードウェイ・道頓堀」を歩いてみましょう。

① 安井道頓・安井道ト紀功碑

大正4年(1915)、大阪府知事・大久保利武が発起人で、安井道頓(成安道頓)、道トの功績を讃えるために建立されました。道頓堀は慶長17年(1612)、安井道頓、安井道トらが私財を投じて、東横堀川と西横堀川をつなぐ梅津川を拡幅開削したことに始まります。大坂城主・松平忠明は、その功績を高く評価して「道頓堀」と名付け、安井道トは沿岸の開発を任じられました。以降、安井家は代々、大坂南組の惣年寄を務めました。ちなみに紀功碑は、大坂城の石垣となるために掘り出されたもの、実際には使用されなかった「残念石」でできています。

② 弁天座跡(竹田の芝居跡)

竹田の芝居は、寛文2年(1662)、からくり芝居を考案した竹田近江が、太左衛門橋南詰東の浜側に創建しました。「撰津名所図会」に、オランダ人が竹田の芝居を見物している場面が描写されており、「竹田のからくりを見ないと大坂に来た甲斐がない」という記述がある程の大坂名物だったといえます。宝暦年間(18世紀中頃)に現在の跡地に移りましたが、明治9年(1876)に火事で焼け、新築してからは弁天座と名乗りました。その後、道頓堀文楽座、朝日座と名を変えましたが、昭和59年(1984)、国立文楽劇場の開場により、その幕を閉じました。

③ 豊竹座跡

元禄16年(1703)、豊竹若太夫(竹本義太夫の弟子)が旗揚げした人形浄瑠璃の芝居小屋です。登場人物の心理描写を重んじ、腹で語ることを身上とした重厚な芸風の義太夫と、音楽美に重点をおき、華麗で技巧的な若太夫は、対照的な芸風をもって競い合い、「竹豊時代」と呼ばれる浄瑠璃の全盛期を作り上げました。明和2年(1765)、若太夫が亡くなったために閉座して、「若太夫の芝居」という歌舞伎小屋に転じますが、明治9年(1876)に焼失。「阪恵座」と名を変え開場しますが、明治10年(1877)に、またしても焼失しました。

④ 相合橋

架橋された1680年代当初は、中橋とよばれていました。名付けられた時期は不明ですが、南側の芝居町と北側の六軒町と呼ばれた遊里を結び橋ということで、「相合橋」という艶のある名前が付けられたといわれています。しかしなぜか、渡ると男女の縁が切れる「縁切り橋」とも呼ばれ、遊里の人々や婚礼の行列は橋を渡るのを嫌ったともいわれています。

⑬ 戎橋

道頓堀川の開削とほぼ同時に架けられ、橋筋は今宮戎神社への参道だったことから、戎橋と名付けられました。橋の南側に操り芝居の小屋があったことから、古くは操橋と呼ばれたともいいます。慶応3年(1867)、徳川慶喜が大坂城で外交使節と引見する際、慶應の風潮に気を遣い(戎=夷)、永成橋と改名されましたが、永くは続きませんでした。

⑫ 大阪松竹座

ネオ・ルネッサンス様式の正面大玄関のアーチが特徴的な大阪松竹座は、大正12年(1923)、松竹の創業者・白井松次郎の手により、日本初の洋式劇場として誕生しました。大阪の洋画の殿堂として優秀な外国映画を封切りしてきましたが、平成9年(1997)に新築開場してからは、芝居街・道頓堀の伝統を今につなげる劇場として、歌舞伎公演をはじめ、松竹新喜劇やミュージカル、レビューやコンサートなどを上演しています。大阪松竹少女歌劇(後のOSK日本歌劇団)の本拠地としても知られています。

⑪ 竹本座跡

貞享2年(1685)、浄瑠璃即ち義太夫節といわれるほど世に名を馳せた竹本義太夫が創設しました。宝永2年(1705)座本を竹田出雲に任せ、近松門左衛門が座付作者、義太夫が専属太夫となってからは、人形浄瑠璃は歌舞伎をしのぐほどの人気を誇りました。「曾根崎心中」(元禄16年・1703)、「心中天の網島」(享保5年・1720)、「仮名手本忠臣蔵」(寛延元年・1748)など、今日演じられる人形浄瑠璃、歌舞伎の演目の多くが、この時代の竹本座で初演されています。その後、人形浄瑠璃の衰退と共に明和4年(1767)閉座。歌舞伎の小屋に転じ、大西の芝居、筑後の芝居、戎座、浪花座と名を変えましたが、平成14年(2002)に閉館しました。

⑩ 芝右衛門たぬき伝説

淡路島・三熊山生まれの犬の芝居好きたぬき、芝右衛門は、ある時、侍に化けて舟に乗りこみ、念願の道頓堀・中座に向かいました。しかし芝居が終わって小屋を出たところで犬に吠えられて正体がばれ、哀れ芝右衛門は人々に殺されてしまいます。芝右衛門の死後、中座では客の入りが悪くなり「芝右衛門を殺した祟りだ」と噂が立ったので、芝右衛門を祀ったところ、翌日から客足が戻り大入りになりました。それ以来、芝右衛門は人気の神として多くの役者たちに厚く信仰されたといえます。また藤山寛美は三熊山に芝右衛門狸の祠を奉納し、以降、毎年、芝右衛門狸の供養祭が続けられています。

⑨ 中座跡(中座くだおれビル)

寛文元年(1661)落成、江戸時代には「中の芝居」と呼ばれていました。上方歌舞伎や松竹新喜劇の本拠地として、最も高い格式を誇る大芝居でした。喜劇の創始者・曾我廼家五郎最後の「無声の舞台」、上方歌舞伎を代表する名優・初代中村鷹治郎の拠点、最後の天才喜劇役者・藤山寛美が亡くなる3日前に「中座に行きたい」と言い、妻と夜遅くに出掛けたというエピソードなど、多くの芝居関係者に愛された芝居小屋でした。平成14年(2002)解体工事中に爆発し全焼しましたが、平成21年(2009)7月に大阪名物の「くだおれ太郎」が1年ぶりに復活して「中座くだおれビル」がオープンしました。

⑧ 道頓堀今井

江戸時代は芝居茶屋「稲竹」を営んでいましたが、大正5年(1916)、今井楽器店に転業、当時まだ珍しかった舶来の楽器を並べ、道頓堀に大正モダン風の風を運びました。後の国民栄誉賞作曲家・服部良一がこの店でフルートを購入したといえます。戦後、うどん屋に転向しました。軒先には、「城と御興(岩おこし)と鷹治郎はん」と大阪人の誇りに数えられた名優・初代中村鷹治郎を偲ぶ岸本水府の句碑「頬かむりの中に日本一の顔」が立っています。

⑦ 太左衛門橋

橋名は、角座に官許の櫓を上げた名代・大坂太左衛門に由来します。町衆が架橋、維持管理した町橋ですが太平洋戦争で焼失。昭和23年(1948)に地元民が経費を負担して木造橋として復旧しました。織田作之助が書いた「女の橋」「船場の娘」「大阪の女」には、太左衛門橋が物語の節目に一場を構成する重要な役割を与えられています。

⑥ 角座跡

寛文9年(1669)開座。江戸時代は「角の芝居」と呼ばれ、「中の芝居」と共に「大芝居」として、高い格式を誇りました。今や世界中のオペラ劇場で見られる「回り舞台」が、世界で初めて設置されたのが角座で、道頓堀の芝居茶屋で生まれた歌舞伎作者、並木正三の発明です。しかし近代以降は松竹芸能の演芸場や、映画館になったりして、平成20年(2008)に、ついに閉鎖されました。

